

## 表参道日記

## 『思わぬ落とし穴に注意』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

新年度が始まって、張り切っていたところに、いきなりの災難に見舞われた。

日曜日、雨が降りしきる中で、ゴルフコンペに参加した。馴染みのコースは、お年寄りが多く、スタート時にベテランのキャディさんより、階段に沿った枕木の上は、滑るので十分にご注意くださいとの案内があった。その際に健康体であった私は、そんな間抜けなおッサンはいえるのかと思いつながら、ゴルフに臨んだ。

そこで後半、あと2ホールというところで、正に指摘された枕木に足をとられ、転倒。経験したことのない激痛に襲われたものの、そのホールは命懸けでダブルボギーを奪取。

とはいえ、流石に、その時点でゴルフは早退し、小宴会のうえ、帰宅しました。当日に運がよかったのは、同伴プレイヤーが美熟女であったこと（遠慮しないで抱きつけば、もつと軽傷であったのかもしれない）と、次の組に整形外科医がまわっていたことだ。

よって直後に、入念なテーピングを施してもらい、捻挫ではなく、骨折の可能性も十分あることを示唆され、一晩、

クーリングと飲酒で我慢したうえで、翌日に友人の病院を受診。

そこで腓骨骨折の確定診断を得て、他に手の施しようのない完璧な手術適応疾患として、翌日に全身麻酔下でプレート固定手術を受けた。

お陰様で、その後の経過は極めて順調であり、遠出は避けたものの1週間後には職場復帰し、自身の患者様より「お大事に」と声をかけられながら診療を行っている日々である。

期せずして医療消費者の気持ちを体感した月となったが、松葉杖やステッキの不便さや、バリアフリーの有難さに気付き、自院には存在しない医療職である理学療法士の仕事の重要性を知った。

マンツーマンで患者と向き合う職種であるが、よくよく考えると急性期医療の現場で1時間近くも二人つきりになる場面はそうはない。

小生が客員教授としてお手伝いした了徳寺大学の卒業生で、いつも笑顔の美人だったので、叔父さんも張り切ったりハビリティションに励んだわけだが、当たり前のこととして、人と人が

対面して成立する医療には相性が大事だと痛感した(もつとも彼女が自分に好感を抱いていたかは定かではないが)。

いずれにしても、スキーやラグビーなどならともかく、ゴルフ場で転倒骨折とは芽えないうに尽きるが、それはそれで珍しいアクシデントでないことも知った。

何でもない日常にも落とし穴が存在することも注意だ。反射神経が鈍ってきたと決して考えたくないが…。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院www.ito-hospital.jp 大須診療所(名古屋分院)www.osu-shinryoujyo.jp

